

血ぬられた懐刀

国枝史郎

青空文庫

別るる恋

「相手の権勢に酔わされたか！　ないしは美貌に魅せられたか！

よくも某それがしを欺むかれたな！」

こう罵つたのは若い武士で、その名を北畠きたばたけあきやす秋安と云つて、

年は二十三であつた。

罵られているのは若い娘で、名は萩野はぎの、十九歳であつた。

罵られても萩野は黙っている。口を固く結んでいる。そうして足許を見詰めている。その態度には憎々しいほどの、決心の相が見えている。

「さようか、さようか、物を言わぬ気か、それ程までに某を、もう嫌って居られるのか。薄情もそこまで行き詰めれば、また潔いものがある。で、某も潔くやろう。二人の仲は今日限りに、あかの他人の昔に帰ろう。が、一言云つて置く、不破小四郎は伴作ばんさく殿の従兄いとこで、関白殿下のご愛臣で美貌と権勢と財宝とを、三つながら遺憾なく備えて居られる。で、幸福のお身の上よ。が、そういうお身の上の方は、何事につけても執着がなくて、女子などにも薄情なものだ。で、其方そなたに予言して置く、間もなく小四郎に捨られるであろうぞ」

捨石から腰を上げた秋安は、萩野を尻眼に睨んだが、そのままスタスタと歩き出した。一切未練は俺にはない——と云つたよう

な歩き方である。とは云え灌木の陰へかくれて、萩野の姿の見えなくなると一緒に、その歩き方は力なげになった。

絶望が心に涌いたからである。

ここは京都の郊外の、上嵯峨かみさがへ通う野路である。御室おむろの仁和寺にんなじは北に見え、妙心寺みょうしんじは東に見えている。野路を西へ辿ったならば、太秦うずまさの村へ行けるであろう。

その野路をあてもなく、秋安は西の方へ彷徨さまよつて行く。

季節は酩たけなわの春であつた。四條の西壬生にしみぶの壬生寺では、壬生狂言があるといふので、洛内では噂とりどりであつた。そうして嵯峨の嵯峨念仏は、数日前に終わっていた。

そういう酩たけなわの春であつた。

この野路の美しさよ。

木瓜ほけの花が咲いている。しどみの花が咲いている。こごめ花の花が咲いている。そうして畑には麦が延びて、巢ごもりうずらをしている。鶉うずら達うずらが、
いうところのヒヒ鳴きを立てている。

農家がパラパラと蒔かれていたが、多くは花に包まれていた。

白いのは木蓮か梨の花であろう。赤紫に見えるのは、蘇枋すおうの花に
相違ない。

と、灌木の裾を巡って、孕はらみ鹿じかが現われた。どこから紛れ込んだ鹿なのであろう？ 優しい眼をして秋安を見たが、臆病らしく走り去った。

白味を含んだ蒼い空から、銀笛の音色を思わせるような、雲雀ひばり

の聲が降つて来る。そうしてヒラヒラと野路からは、絹糸のよう
な陽炎かげろうが立つ。

万事四辺あたりは明るくて、陽気で美しく楽しんでそうであった。
が、暗いものが一つあった。他ならぬ秋安の心であった。

「萩野と馴染んで一年になる。その交情は厚かつたはずだ。あの
女を苦しめた覚えはない。愛して愛して愛し抜いたはずだ。裏切
られるような薄情なことを、俺は一度もしたことがない。にもか
かわらず裏切られた。女の心というものは、ああも手の平をか翻え
すように、ひっくりかえるものだろうか？」

考えながら歩いて行く。

「あの花園の森の中で、去年松の花の咲く頃に、はじめて恋を語

り合つたが、同じ松の花の咲く季節の、今年の春には同じ森で、
氣きま不味い別離を告げようとは……何だか俺には夢のようだ。化か
されていようような氣持もする」

考えながら彷徨つて行く。

と、にわかには笑い出した。

「ハツハツハツ、何と云うことだ！ 未練もいい加減にするがい
い。向こうから俺を捨たのだ。何をクヨクヨ思っているのだ」

しかしやっぱり寂しかった。

で、あてなしに歩いて行く。

しかしそういう寂しい心を、厭でも捨なければならぬような、
一つの事件が勃発した。

行く手の森陰からけたたましい、若い女の悲鳴が聞こえて、つづいて四五人の男の声が、これもけたたましく聞こえたからである。

で、秋安は走って行った。

廻国風の美しい娘を、五人の若い侍が、今や手籠めにしようとしている。

助けた女は？

それと見てとつて秋安が、勃然と怒りを発したのは、まさに当

然ということが出来よう。

「方々！」と声をかけながら、武士の間へ割って行つたが、

「お見受けすればいずれも武士、しかも立派なご身分らしい。しかるに何ぞや若い娘を捉えて、乱暴狼藉をなされるとは！ 体面にお恥じなさるがよろしい！」

叱咤の声をひびかせた。

凜々しい態度と鋭い声に、氣を吞まれたらしい五人の武士は、捉えていた娘を手放すと、一斉に背後へ飛び退いたが、見れば相手は一人であつた。それに年なども若いらしい。で、顔を見合させたが、中の一人が進み出た。

「これ貴様は何者か！ 我々の姿が眼に付かぬか！ 銀の元結、

金繡の羽織、聚楽風じゅらくふうだぞ、聚楽風だぞ！

云われて秋安は眼を止めて見た。

いかにもそれは聚楽風であつた。

すなわち関白ひでつぐ秀次に仕える、聚楽第の若い武士の、一風変わった派手やかな、豪華を極めた風俗であつた。

そうしてその事が秋安の心を、一層の憤りに導いた。

「ははあ左様か、ご貴殿方は、関白殿下にお仕えする、聚楽第のお歴々でござるか。ではなおさらのこととでござる。乱暴狼藉はおやめなされ！ それ関白と申す者は、百官を總すべ、万機を行ない、天下を関はかり白もうする者、太政大臣たじょうだいじんの上に坐し、一ノ上とも、一ノ人とも、一ノ所とも申し上ぐる御身分、百姓せいの模範たるべきお

方であるはずだ。従つてそれにお仕えする、諸家臣方におかれても、等しく他人ひとの模範として、事を振舞いなさるが当然。しかるに何ぞや娘を捉え、淫がましい所業しわざをなさる！ いやいよお恥じなさるがよい」

ウンとばかりに遣り込めた。

こう云われたら一言もなく、引き下るかと思つたところ、事は案外に反対となつた。五人刀を抜きつらね、秋安へ切つてかかつたのである。

「関白の説明汝に聞こうか！ 地下侍じげざむらいの分際で、痴おこがましいこ

とは云わぬがよい。ここに居られるのは殿下の寵臣、不破小四郎行春様だ。廻国風のその娘に、用あればこそ手をかけたのだ！

じやま立てするからにはようしやはしない、おのれ汝犬のように殺してくれよう！」

一人が翻然と飛び込んで来た。

身をひるがえした秋安は、太刀を抜いたが横ツ払った。殺しては後が面倒だ、そう思ったがためであろう、腰の支つがいを平打ちに一刀！

「ウ——ム」と呻いてぶっ仆れる。

と、懲りずまにもう一人が、刎ねるがように切り込んで来た。

すかさず突き出した秋安の太刀に、ガラガラガラと太刀を搦らまれ、ギョツとして引こうとしたところを、秋安太刀をグツとセメた。ガラガラと地上で音のしたのは、敵が獲物を落としたから

である。

「これ！」と叫ぶと秋安は、五人をツラツラと見渡したが、

「不破小四郎と申したな！ 誰だ、どいつだ、進み出る！ この秋安一見したい！ 少しく拙者には怨みがある」

ここで一人へ眼をつけたが、

「ははあ貴殿か！ 貴殿でござろう！」

そっちへツカツカと歩み寄る。

歩み寄られた若侍は、いかさま不破小四郎でもあろう、一際目立つきらびやかなの風で、そうして凄いような美男であった。

が、案外な卑怯者らしい。太刀こそ抜いて構えてはいるが、チタ、チタ、チタと後へ引く。

秋安にとっては怨敵である。萩野を奪われた怨みがある。

「こいつばかりは叩つ切つてやろう！」

で、ツツ——ツと寄り添った。

主人あやうしと見て取ったものか、二人の武士が左右から、挿むようにして切り込んで来た。

と、鏘然たる太刀の音！

つづいて森の木洩陽を縫つて、宙に閃めくものがあつた。払い上げられた太刀である。

すなわちは北畠秋安が、一人の武士の太刀を払い、そうして直ぐにもう一人の太刀を、宙へ匆ね上げてしまったのである。

と、逃げ出す足音がした。

主人の小四郎を丸く包み、五人の武士が太刀を拾わず、森から外へ逃げ出したのである。

「待て！」と秋安は声をかけたが、苦笑いをするると突立った。

「追い詰めて殺すにも及ぶまい。崇りのほどがうるさいからなあ」
で、抜いた太刀を鞘へ納め、パチンと鏢音を小高く立てたが、改めて娘の様子を見た。

木洩陽を浴びて坐っている、廻国風の娘の顔の、何と美しく高いことよ！

そうしてこれほどの鬪いにも、大して恐れはしなかつたと見え、別に体を顫わせてもいない。

とは云え勿論顔の色は、蒼味を加えてはいるのである。

「ほう」

秋安が声を上げたのは、その美しさと気高さにと、心を驚かせたからである。

恋を失った秋安は、どうやら意外の出来事から、新しい恋を得るようである。

が、それはそれとして、この日が暮れて夜になった時、花園の森の一所へ、一人の女が現われた。

闇の中の声

「秋安様の予言どおりに、妾は小四郎様にあざむかれた」
さも後悔に堪えないように、声に出して女は呟いたが、他ならぬ娘の萩野であつた。

今宵も忍んで来るがよいと、こういう約束があつたので、萩野は恋心をたかぶらせながら、聚楽第の付近にある、小四郎の住居まで行つたところ、小四郎はどうしたものであろうか、けんもほろろの挨拶をして、萩野を追い返してしまつたのである。

「野に在る花は野にあるがよい。其方はやっぱり野にある花だ。
しかるに私は聚楽の家臣、地下の者とは身分が違ふ。何もお前を嫌うのではないが、これまでの縁はこれまでとして、其方は其方

の昔にかえり、私は私の昔にかえろう。で、今後は私も行かぬ。其方も私を訪ねないがよい」

こういう露骨の言葉をさえ、萩野は小四郎から貰ったのである。ことの意外に驚きながらも、どうすることも出来なかつた。しかしどうしてそうもにわかには、小四郎の心が変わったのか、萩野には見当が付かなかつた。

で、それだけでも聞きだそうと思つて、小四郎の袖を抑えた時、くぐりど潜戸が内からとぎされた。で、聞くことさえ出来なかつた。

で、そのままはしため婢女を連れて、しおしおと家へ帰つたのであつたが、悲しさと口惜しさと怒りとで、眠ることなど出来そうもない。

で、フラフラと家を出て、近くの花園の森へまで、来るともなしに来たのであった。

萩野は松の木へ額をあて、じつと物思いに沈んでいる。

木洩れの月光が森の中へ、薄蒼い縞を投じている。それに照らされた萩野の肩の、寂しそうなことと云うものは！

と、その肩が顫え出した。すすり泣いている証拠である。

「小四郎様とひきくらべ比較ひきくらべて、秋安様の親切だったことは！　そうい

うお方を振りすてて、小四郎様へ気を向けたのは、わたし妾の愚かというよりも、魔が射したものと思わなければならぬ。そのあげくに妾は捨られたのだ。誰にも逢わず顔がない。ましてや今さらオメオメと、秋安様とは逢うことは出来ない。ちよつとした心の迷

いから、二つの恋を失ってしまった」

限りない絶望と悔恨とが、今や萩野をとらえたのである。

「ああこの森で秋安様と、幾度あいびき媾あひびきをしたことやら。そのつど何と秋安様が、妾を愛撫して下すつたことやら。思い出の多い花園の森！ 一本の木にも一つの石にも、忘れられない思い出がある」

フラフラと萩野は歩き出した。

「ああここに杉の木がある」

一本の杉の木へ手を触れたが、しずかに幹を撫で廻した。

「この木の幹に背をもたせかけて、はじめて秋安様がこの妾へ、恋心をお打ち明け下されたのは、一年前の今頃であった。あの時

妾はまあどんなに、嬉しくも恥しくも思ったことか。『妾は幸福でござります。妾も貴郎様をお愛しします』と、茫ぼつとした声でお答えしたはずだ」

一本の桜の老木があつた。木洩れの月光に浮き出して、満開の花が綿のように、森の天井を染めている。

その桜の木へ障さわつたが、萩野は幹へ額をあてた。

「この桜の花の下で、行末のことを語り合い、あのお方の熱い唇を、はじめて額へ受けたことがある。昨日きのうのように思われるが、やはり一年の昔だった」

松の巨木が聳えている、幹に月光が斑を置いていた。

その幹へ萩野は寄りかかったが、袂で顔を蔽うようにした。に

わかにか体が縮ちぢまったのは、根元へうづくまったからであろう。しばらくの間は身動きもしない。何かを思い詰めているらしい。ただ肩ばかりが顫えている。いぜんとして泣いているからであろう。やがて心を定めたかのように、萩野はゆるゆると立ち上ったが、腰の辺りを探り出した。

と、紐がクルクルと解けた。

仰ぐように顔を上向けて、松の下枝へ眼をやったが、片手を上げて紐を投げた。

松の枝へかかって下った紐を、両手で握って引いたのは、縊くびれて死のうとするのもあろう。

縊くびれて死のうとしたのであった。

しかし紐の端へ頤をかけた時に、背後うしろから二本の腕が出て、萩野の肩を引つかかえた。

「ひとつ御相談にのりましょう。短気はおやめなさりませ。死ぬほどの事情がありましたも、生きられる事情にもなりますもので。ひとつ御相談に乗りましょう。私にお任せまかなさりませ」

つづいてこういう声でしたが、優しい老人の声であった。

秋安の館

ちょうど同じ晩のことであるが、秋安の屋敷の一間の中で、廻

国風の美しい娘と、北畠秋安とが話していた。

秋安の父は秋元あきもとと云い、北畠親房ちかふさの後胤として、非常に勝

れた家柄であつた。学者風の人物であるところから、公卿にも、武家にも仕えようとはせずと、豪族の一人として閑居していた。

じゅらくだい

聚楽第の西の花園の地に、手広い屋敷を営んで、家の子郎党も多少貯え、近郷の者には尊敬され、太閤秀吉にも認められ、殿上人にも親しまれて、のびやかに風雅にくらしていた。しかし身分は無位無官で、地下侍には相違なかつた。

「人間の栄華というようなものは、そうそう長くつづくものではない。よし又長くつづいたところで、大して嬉しいものではない。栄華には栄華の陰影かげとして、不安なものがあるものだ。人の本当

の幸福は、小慾にあり知足にある」

これが秋元の心持であつた。従つて伏見桃山の栄華や、聚楽の豪奢に対しても、全くのところ風馬牛であつた。

とは云え関白秀次の態度——すなわち兇暴と荒淫との、交響楽じみた態度については、苦々しく思つていた。

「今にあの卿は亡ぼされるであらう」と、人に向かつて噂などもした。

そういう秋元の子であつた。秋安も閑雅の人物であつたが、若いだけに覇気があつて、いいささちよういさい飯篠長威斎の剣法を学び、極意にさえも達していた。

そういう豪族の居間である。

秋安と美しい廻国風の娘と、語り合っているその部屋には、狩のうさんらく野山樂の描いたところの、雌雄孔雀の金屏風が、紙燭の燈火ひかりを明るく受けて、さも華やかに輝いている。

「……そういう訳でございまして、妾わたしの父母と申しますものは、秀次公に滅ぼされました、佐々隆ささたかゆき行の一族で、相当に栄華にくらしました。でも両親が宗家と共に、城中で切腹いたしました、妾一人が乳母や下僕に、わずかに守られて城を出てからは、昔の栄華は夢となり、丹波たんばの奥の狩野かのの庄で、みすぼらしく寂しく暮らしました。その中に親切な乳母も下僕も、この世を去ってしまいましたので、いよいよ妾は一人ぼっちとなり、途方にくれたのでござります。今は天下は治まりまして、秀次公には関白職、そ

うして妾は女の身分、それに戦いで滅ぼされましたは、戦国時代の習慣としまして、誰も怨もうこともなく、で、妾わたくしといたしましては、今さら父母の仇敵と、秀次公を狙おうなどは、決して思つては居りませぬところが、手頼たより無い身でござりまするので、いつそ両親の菩提のために、諸国の神社仏閣を、巡拝いたそうと存じまして、京都へ参つたのでございました。でもともかくも秀次公に仕える聚楽第の若いお侍に、手籠めに合いなどいたしましたら、逝き父母に対しては申訳なく、妾自身に対しましては、恥しい次第にございます。……ほんにあの時お助け下され、何とお礼を申してよいやら、有難い次第にござります。……それにこのようにご親切に、お屋敷へさえお連れ下され、手厚い介抱を受けま

して、いよいよ忝かたじけなく存じます」

その娘の名はお紅べにと云い、北国の名家、佐々隆行、その一族の姫なのであった。その父の名は時ときあきら明、その母の名はお園の方、一時はときめいた身分なのであった。

それであればこそお紅という娘も、貧しい貧しい廻国風の姿に、身を肖してはいるけれど、臍へらたけいまでに品位があり、容貌が打ち上つて見えるのであった。

素性を聞いたために秋安が、いよいよお紅という娘に対して、いわれぬ愛着と尊敬とを、感じたことは言うまでもない。

で、幾度も領いたが、

「いずれ由緒よしあるお身の上とは、最初から存じて居りましたが、

そのような名家の遺わすれがたみ児とは、思い及びも致しませんでした。

そういうお方をお助けしたことは、この秋安にとりましては、名譽のことにござります。で、お尋ねいたしますが、今後はいかようになされます？ やはりご廻国なさいますお気で？」

「はい」と云うと娘のお紅は、寂しそうに顔を俯向けたが、

「手頼り無い身にござります。一人ぼっちの身にござります。やはり諸国を巡りまして、神社仏閣を参拝し、この一生を終わります他には、手段はないように存ぜられます。今宵一夜だけお泊め下されて。明日はお許し下さりませ。早々においとまいたしまし
て……」

「旅へ立たれるお意つもりなので？」

「そう致しとう存じます」

「が、またもや悪漢どもが、苦しめましたならどうなされます」

途絶えた鼓

これがお紅には気がかりなのであろう。俯向いたままで黙っている。

どうやら夜風でも出たらしい、この離座敷はなれの中庭あたりで、木々のざわめく音がした。

庭には花が咲いているはずだ。風に巻かれて諸々の花が、繚乱

と散っていることであろう。

が、この部屋は静かである。燈火がともしび金屏きんぺいに栄えている。円窓の障子に薄蒼く、月の光が照っている。馨しい焚物の匂いがして、唐金の獅子型の香炉から、細々と煙が立っている。

なやましい春の深夜である。

それに似つかわしい美男、美女が、向かい合つて黙つて坐つて
いる。

花ヲ踏ンデ等シク惜シム少年ノ春

燈火ニ背ムイテ共ニ憐ム深夜ノ月

そう
という眺めと云わなければならない。

と、鼓の音がした。秋元の居間から聞こえてくる。つれづれの

ままに取り出して、秋元が調べているのであろう。曲はまさしく敦あつもり盛であつた。一つ一つの鼓の音が、春の夜に螺鈿らでんでも置くように、鮮やかに都雅に抜けて聞こえる。

秋安とお紅とは顔をあげたが、じつとその耳を傾けた。

と、自ずから眼が合った。

「まずお聞きなさりませ」

眼を見合わせた一瞬間に、秋安はお紅の眼の中に、愛情の籠もっていることを、直覺的に見て取つた。

「廻国をするということは、この娘の本当の願いではない。たしかにこの俺を愛している」

そういうことも感ぜられた。

で、秋安は勇気づいて、思う所を述べ出した。

「まずお聞きなさりませ」——秋安は云いつづけた。

「手頼り無いお身の上でござりましょう。では貴女あなたには何を措いても、手頼りになるような人物を、お求めにならないければなりません。一人ぼっちでござりましょう。では貴女は、何を措いても、一人ぼっちでないように、お務めなされなければなりません。天下は治まっては居りますものの、洛中にさえ乱暴者はいます。ましてや他国へ出ましたならば、魑魅魍魎ちみもうりょうにも劣るような、悪漢どもが居りまして、よくないことをいたしましょう。で、そのよ
うな危険な旅へ、好んでお出かけなさるよりも、ここに止まりな
さりませ。私ことは土地の豪族で、先祖は北畠きたばたけちかふさ親房で、名家

の末にござります。家の子郎党も多少はあり、家の生活くらしも不自由はせず、父は学究でござりまして、心も寛ひろく親切でもあり、そうして私といたしましても、自分で自分を褒めますのは、ちとおかしくはござりますが、まず悪人ではござりませぬ。名家の遺児の貴方様を、ここでお世話をいたすことぐらひは、私の家といたしましては、何でもないこととござります。そうして率直に申しますれば、私の心と申しますものは、ただいま寂しいのでござります。訳はただいまは申しませぬが、ある軽率な女子のために、裏切られたからでございます。……でもし貴女がお止まり下され、朝夕お話し下されましたら、どんなに私といたしましては、有難いこととござりましょう。心の傷手も自然と癒り、ほんとうに新

しく生きることが、出来ますようにも存ぜられます。……是非にお止まり下さりませ。それこそ貴女のおためでもあれば、私のためでもござります。助け合う者がありましたこそ、慰め合うものがありましてこそ、この殺伐でくらしにくい、厭な人の世もくらしよくなり、生きて行くことが出来ましょう」

しかしお紅はそう云われても、すぐにその言葉に応じようとはせず、いぜんとして黙って俯向いていた。

と云つて秋安のそういう言葉を、決して疑っているのではなく、ましてや秋安の親切な心を、受け入れまいとしているのではなかつた。

ただお紅の心としては、秋安の好意が著しいために、かえつて

それに圧倒され、そうしてそれに従うことは、その著しい秋安の好意に、つけ込むように感ぜられて、相済まないように思われるのであった。

素性の卑しい人間ならば、相手の好意に取り縋って、すぐにも自分の苦しい境遇を、救って貰おうとするだろう、立派な素性であるがために、かえってお紅は矛盾を感じて、心を苦しめているのであった。

で、しばらくは無言である。

鼓の音ばかりが聞こえてくる。

が、にわかには鼓の音が、糸でも切ったようにフツと切れた。

これはどうしたことなのであろう？ 曲は終わってもいないの

に。

しかし向かい合つて沈黙して、互いに相手の心持を、探り合つている二人には、にわかには切れた鼓の音に、注意の向かうはずはなかった。そうして、いつそう人の足音が、秋元の居間から幽かに聞こえ、そうして襖が一二度開き、そうして足音が家の中から、庭上へ移つたということなぞに、感付かなかつたのは当然と云えよう。

骸を前の新生の恋

とは云え忽ち庭上から、

「何者！」という鋭い声が響き、つづいてアツという悲鳴が起こり、それに引きつづいて乱れた足音が、いくつか聞こえてきた時には、秋安とお紅も感付いた。

素破すわ！ と云うような意気込みで、秋安は円座から飛び上ったが、鹿角にかけてあつた太刀を握つかむと、襖をひらいて外へ出た。出た所に縁がある。縁を飛び下りた秋安は、声のした方へ突つ走つた。

蒼白い紗布しやぎぬでも張り廻したような、月明の春の夜が広がっている。そういう春の夜の寵児かのように、のびやかな空へ顔を向けて、満開の白い木蓮が、簇々として咲いていたが、その木蓮の

花の下に、拔身を引つ下げた一人の武士が、物思わしそうに佇んでいた。

見れば足許に一人の武士が、姿の様子で大方は解^{わか}る、切られて転がって斃れていた。

秋安はそつちへ走り寄つたが、

「父上、何事でござりますか？」

拔身を引つ下げて佇んでいたのは、秋安の父秋元であつた。

「うむ、秋安か、この有様だ」

それから太刀へ拭いをかけ、鞘へソロリと納めたが、

「実はな、音色が変わつたのだ」

「は？ 音色？ 何でござりますか？」

「調べていた鼓の音色なのだ。……それが何となく変わったのだ。……そういうことも無いことはない。おおよその楽器というものは、調べる人の心持によつて、音色を変化させると共に、あたり四辺の著しい変化によつても、また音色を変えるものだ。……鼓の音色が変わつたのだ。で、庭へ出て見たのさ。五六人の武士がいるではないか。で、誰何したというものだ。すると一人が切りかかつて来た。で、一刀に切り伏したところ、後の者は一散に逃げてしまつた」

死骸へ改めて眼をやつたが

「その風俗で大概は知れる。困つた奴らがやつて来たものだ。何の目的かは知らないが。……そち其方も用心をするがよい」

花木の間だをくぐるようにして、秋元は静かに歩み去ったが、月光を浴びた背後姿が、ひどく心配のある人のようであった。

と、その時人の影が、忍びやかに秋安へ近づいて来た。

たしなみの懐刀を握りしめたところの、廻国風の娘であった。

「秋安様」と寄り添うようにした。

「ああここに切られた人が！」

「聚楽じゅらくの奴原やつばらにござりますよ」

秋安は死骸を指さしたが、

「貴方あなたを手籠めにいたそうとした、彼らの一人でござりますよ」

お紅には言葉が出なかつた。俯向いて死骸を見下ろしている。

「都にあつてもこの有様でござる。一度地方へ出られようものな

ら、もつと恐ろしい数々のことが、降りかかって来ることでござりましょう。お紅どのここへお止まりなされ。我々がご保護いたしましよ」

無意識に秋安は手を延ばした。

これもほとんど無意識のように、お紅も片手を上げた。

で、死骸を前にして、二人の手と手とが握られた。

白い木蓮が背景となつて、手を取り合つた男女の姿が、月下に幸福そうに立っている。

しかしこういう二人の恋が、無事に流れて行こうとは、想像されないことであつた。

執念深くて淫蕩で、傍若無人で権勢を持った、聚楽の若い侍に、

お紅は狙われているのである。

奪い取られると見做さなければならぬ。

どのように北畠一家の者が、そのお紅を保護した所で、守り切れないことともなろう。

しかし、お紅にも秋安にも、そういう形勢は解っていた。

「もしものことがあるものなら、潔よく自害をいたします」
九耀の星の紋所の付いた、懐刀をお紅は秋安に示して、そういうことを云ったりした。

が、ともかくも五日十日と、その後無事に日が流れて、二人の恋は愈々益々、その密さこまやかを加えて行つた。

不破小四郎の邸

「浮田鴨丸うきたかもまるめが不足している。ちよつと寂しい気持がする」

「まさかにあの晩に鴨丸めが、切り付けようとは思わなかった」

「性来鴨丸めは周章者あわてなのだ」

「それに北畠秋元めが、切り返そうとは思わなかった」

「それに第一秋元めは、どうして俺達の忍び込んだことを、感付いたものか合点がいかない」

「随分上手に忍び込んだのだが」

「のっそりと秋元が現われた時には、さすがに俺もギョツとした

よ」

「秋元め随分冴えた腕だの」

「一刀に鴨丸を斃したのだからな」

「仰天して俺達は逃げ出したが、いつまでもマゴマゴしていようものなら、やっぱり秋元に切られたかも知れない」

「切られないまでも捕らえられでもしたら、それこそ本当に目もあてられない」

「何と云ったところで若い娘を、引つ攫おうとしたのだからな」

「いぜん娘は北畠の邸に、身をかくしているということだ」

「外出などもしないそうだ」

「つまりは守られているのだろう」

不破小四郎の邸の一間で、四五人の若い武士^{さむらい}達が、雑然として話している。

宵を過ぎした初夏の夜で、衣笠^{きぬがさ}山の方へでも翔^かけるのであるう、杜^{ほととぎす}鶉^{ひでつぐ}の声が聞こえてきた。

小四郎は秀次^{ひでつぐ}の寵臣である。邸なども豪華である。銀燭などが立ててある。

その銀燭を左手へ置いて、上座の円座に坐っているのは、邸の主人の小四郎で、前髪も剃らない若衆であつたが、不愉快そうに苦り切っている。

「俺はな」と小四郎は云い出した。

「ひどくあの娘が好きなのだ。廻国風の娘がよ。で、どうしても

手に入れなければならぬ。そこでお主達に頼んだのさ。是非あの娘を盗み出してくれとな。ところがお主達はやりそこなつた。先刻さつきから話を聞いていれば、どうやら今後もお主達の手では、盗み出せそうにも思われぬ。あきらめてしまえばいいのだが、変に俺にはあきらめられない。一体俺にしてもお主達にしても、普通なみの女には飽きている。つまり上流の娘とか、ないしは遊女とかいうようなものには、もうすっかり飽きている。漁つて漁つて漁りぬいたからよ。で、土民の娘とか、地下侍の娘とか、そういう種類の女共に、ついつい引つ張られるというものさ。それお主達も知っている通り、萩野という地下侍の娘があつた。そうしてそいつを手に入れた。いや随分面白かつた。その手障てざわりが違つ

ていたからな。ところがどうだろうあの女を見てから——廻国風の娘のことだが——すっかり萩野に厭気がさし、薄情ではあつたがつつ放してしまった。……で、そういう訳なのだ。そんなにも劇しく廻国風の娘に、この俺は今捉えられている。ところが手に入れる手段がない。そこで俺は考えたのだ。ご主君にお縋りしようとな。関白殿下にお願いして、関白殿下のご威光を以て、あの娘を御殿へ引き上げるのさ。そうしてそれから改めて、殿下から俺が戴くのだ。これではいかな北畠家でも、何とも苦情は云えないだろう。名案と思うがどうだろうか？」

佞奸ねいかんの徒には佞奸の徒らしい、佞奸の策略があるものである。こう云つて来て不破小四郎は、得意そうに、一座を身廻した。

「いやこれは素晴らしい妙案」

「さすがは聡明の不破殿だ、よい所へお気が附かれた」

座に集まった一同の武士は、即座に同意をしてしまった。

「しかし」とこの時一人の武士が——栃木三四郎という若武士わかざむらいであつたが——ちよつと不安そうに首を傾げたが、

「目下伏見から幸蔵こうぞう主殿が、太閤殿下のお旨を帯して、聚楽じゅらくにご滞在なされて居られる。この際そのような振舞いをして、よろしいものでござろうかな？」

「いや大丈夫、大丈夫」

こう云いながら手を振つたのは、桃ノ井紋哉もんやという若い武士であつた。

「幸蔵主殿は私用とのこと、何も恐れるには及ばない。それに我君と幸蔵主殿とは、幼少の頃からのご懇親で、万事につけて聚楽のお為を、以前からお計らい下されて居られる。悪いようには覚し召すまい」

「いやいや一考する必要がある」

こう意議をはさんだ武士があつた。加嶋欽作かしまきんさくという若武士である。

「女ながらも幸蔵主殿は、太閤殿下の懐ふところ中刀で、智謀すぐれて居られるとのこと、なかなか油断は出来ませぬ」

「それに」ともう一人が心配そうにした。山崎内膳ないぜんという若武士である。

「ご宿老の木村常陸介様ひたちのすけが、幸蔵主殿のおいで以来、氣鬱のよ
うに陰気になられた。その常陸介殿はどうかというに、智謀逞邁、
誠忠無双、容易に物に動じないお方だ。そのお方が陰気になられ
たのだ。幸蔵主殿の聚楽参第は、単なる私用とは思われない」

聚楽第の秘密

そもそも幸蔵主とは何者であろうか？ 豊臣秀吉の大奥に仕え
てその切り盛りをしているところの、いうところの老女であつ
た。女ながらもずば抜けた知恵者で、一面権謀術数に富み、一面

仁慈寛大であつた。加藤清正や福島正則や、片桐且元かたぎりかつもとといふような人さえ、幸蔵主には恩顧を蒙り、一目も二目も置いていた。秀吉さえも智謀を愛して、裏面の政治に関与させ、懐中刀として活用した。もう老年ではあつたけれど、壯者をしのぐ、意気もあつた。

また秀次が孫七郎なのと宣つて、三好法印ほういんじょうかん淨閑なるものの、実子として家にいた頃から、幸蔵主は秀次を知つていた。三好康長やすなが秀次を養い、さらに秀吉が養子として、秀次を殊遇しはじめた。幸蔵主は一層秀次に眼をかけ、よき注意を与えていた。で、幸蔵主は秀次にとつては、母とも乳母ともあたる人であつた。ところで秀次は累進して、そうして秀吉の後を受けて、関白職

に経上つて、聚樂じゅらくの第だいの主人となつて、権を揮うようになって以来、ようやく秀吉と不和になつた。

秀吉の謀將の石田三成や、増田長盛ながもりというような人と、気が合あわなかつたのが原因の一つで、秀吉の愛妾の淀君なるものが、実子秀頼ひでよりを産んだところから、秀頼に家督をとらせたいと、淀君も思えば秀吉も思つた。自然秀次が邪魔になる——というのが原因の第二でもあつた。

秀吉との不和は秀次にとっては、何よりも恐ろしいものであつた。で、甘心を買おうとした。それを中にいて斡旋したのが他ならぬ老女の幸蔵主であつた。

その幸蔵主が忍ぶようにして、伏見の秀吉の居城からこの聚樂

へ来たのであつた。

そうして何やら幸蔵主は、秀次に旨を含ませたらしい。

どういう旨だか解わからない。

しかしどうやら秀次にとっては、快くない旨らしい。それには従おうとはしないのであつた。

そうして終日不機嫌であつた。

で、何となくここ数日、聚楽第の空気は險悪であつた。

「ナーニ大丈夫だ大丈夫だ」

不破小四郎は事もないように、さも不雑作にこう云つたが、自信がありそうに一同を見た。

「幸蔵主の姥がやって来て、殿下のご機嫌がよくなって、終日終

夜の乱痴気騒ぎで、上下が昏迷をしているのが、かえって俺には好都合なのさ。どさくさまぎれに申し上げて、殿下のお許しを受けるのさ。よろしい行れ！ と仰せられるであろうよ。どっちみち俺は明日か明後日、関白殿下のお使者として、北畠の邸へ出かけて行こう。承^き知くも承^き知かないもありはしない。関白殿下よりのご命令なのだ。娘を差し出すに相違ない。承^き知かない場合には攫^{さら}って来る」

間違いはないよと云うように、小四郎は額をこするようにしたが、果たして成功するであろうか？

巨人と怪人

その日からちようど二日経った。

ここは聚楽の奥庭である。おりから深夜で月はあつたが、植え込みが茂っているために、月の光が遮られている。

一字の亭ちんが立っていて、縁の一所が月光に濡れて、水のように蒼白く暈けていた。

そこに腰をかけている武士がある。

思案にあまつたというように、胸の辺りへ腕を組んで、じつと足許を見詰めている。

木の間をとおして聚楽第の、宏壯な主殿おもやが見えていたが、今夜

も酒宴と思われて、陽気な声が聞こえてくる。間毎々々まごとまごとに点もされた燈ひが、不夜城のようにも明るく見える。

「どうしたのだろう、遅いではないか」

縁に腰をかけた大兵の武士は、誰かを待つてでもいると見えて、ふとこう口に出して呟いた。

と、その呟きに呼ばれたかのように、巨大な蘇鉄の根元を巡つて、小兵の武士があらわれた。

「木村殿かな？ 常陸殿ひたちかな」

「おお五右衛門か、待ちかねていたよ」

「約束の時刻よりは早いつもりだ」

云い云い静かに歩み寄つて、縁へ腰をかけた常陸介と、押し並

ぶように腰かけたのは、無徳道人むとくどうじん 事石川五右衛門であつた。

ちよいと五右衛門は主殿おもやの方を見たが、

「相変わらず今夜も盛んだの」

「うん」と云つたものの常陸介の声には、憂わしい不安な響きがあつた。

「あの有様だから困るのだ」

「そうさ、あれでは困るだろう」

で、沈黙が二人へ来た。

「ところで五右衛門結果はどうだ？」

ややあつて常陸介がこう訊たずねた。

「うむ、ともかくも一通りは探つた」

五右衛門の声には笑しやうさつ殺がある。

「ただの私用ではないのだよ」

「俺もそうだろうとは感付いていたが、幸蔵主の態度が不明なのでな」

「あれは秀吉の懐ふところ中刀さ」

「が、我君にも忠実のはずだ」

「しかしそれは私情だよ。大事に処せば私情などは、古ふるくつ沓のよ
うに捨てしまう」

「お互いそれには相違ないさ。……で、幸蔵主が我君を連れて伏
見の城へ行こうとするのは、やはり太閤の指し金かな？」

「そうだ秀吉の指し金なのだ」

「伏見へ召してどうするのだろうか？」

「まず詰腹でも切らせるだろうよ」

「詰腹。……ふうむ。……そうかも知れない。……」

常陸介にもそういうことは、以前から心にあつたものと見えて、そう云われても驚かなかつた。しかし苦悶は感じたらしい。俯向いて足許を睨んでいる。五右衛門もしばらくは物を云わない。で、この境地はひそやかであつた。

それと反対の趣をなして、明るい華やかな笑い声が、主殿の方から聞こえてきた。

「五右衛門」と常陸介は呼びかけた。

「ひとつ詳しく話してくれ、伏見はどんな様子なのだ」

「詳しく話せと云ったところで、これと云つて詳しく話すところもないが。だがマア探つただけを話して見よう。……お前から頼のみを受けたので、その足で直ぐに伏見へ行つて、城中へ忍んだというものさ。秀吉め天下に敵がないというので、安心しきつてい

るのだろう。城のかためなんか隙だらけだった。で、奥御殿へ行くことが出来た。それでもさすがに宿直とのいの部屋には、仙石せんごく権兵衛だの薄田すすきだはやと隼人だのが、肩や肘を張つて詰めていたよ、しかしそいつの話と来ては、お話にも何にもならなかつた。女の話ばかりしているのだからな。ところで秀吉はどうかといえ、例の淀君めを相手にして、これもやはりたわいないことを、話していたというものさ。と、声が聞こえてきた。

『……幸蔵主に胸を含ましておいた。大方うまくやるだろう。……そう心にかけないがよい。……実子は俺だって可愛いからの……』

秀吉が淀君へ云つたのさ。すると淀めが笑い出したつけ。——これだけ聞けば用はない。で城から抜け出したが、その時つくづく思つたものだ。ナニ秀吉の寝首などは、搔こうと思えば搔けるものだな。……秀吉だと云つたつて人間だ、油断もあれば隙もあるとな。……それから俺は念のために、石田治部ちぶめの屋敷へ忍んだ。するとどうだろう増田長盛ながもりめが、ちやんと遣つて来ていてるではないか。

『幸蔵主殿の甘言を以て秀次君をおびき出し、城中で詰腹を切ら

せましよう』

『いやいや我君のお眼に入れては、血縁のある伯父姪でござる。いつそ途中の伏見街道で、お腹を召さすがよろしかろう』

これが二人の話なのだ。——これだけ耳にすれば用はない。で俺は直ぐに抜け出したのだが、道々俺は考えたよ。大胆不敵の話だと。何故というに他でもない。とにかく天下の関白職を、まるで鶏でも絞めるように、無雑作に殺すことに決めているからさ。そうしてにわかには恐ろしくなった。やはり秀吉は偉い奴だ。やろうと思えばどんなことでもやる。とても普通の人間ではない。隙だらけと思つていた伏見の城が、恐ろしいものにも思われて来た。今度忍んだら遣やられるだろう——そんなようにも思つたものさ」

二人ながら黙っている。

忍び込んだ武士は？

石川五右衛門は浪人であつた。学者でもあるし茶人でもあるし、伊賀流の忍しのびもよくするし、俠気もあれば氣概もあつたが、放浪性に富んでいて、物に飽き易くて辛抱がなくて、則のりに附くことが出来なかつた。二三の大名が才幹を愛して、召しかかえたこともあつたけれど、朋輩との中が円満にゆかない。

で、すぐに浪人をした。それを知つた木村常陸介ひたちのすけは、何かの

用に立つこともあろうと、莫大な捨扶持を施して、ここ二三年養つて置いた。

すると五右衛門のことである、常陸介を主人と崇あがむべきを、友人のように思つてしまつて、対等の交つきあい際をやり出した。

大概の人物なら怒つたであろう、ところが常陸介は大人物であつた。そのようなことは意にもかけずに、同じように対等の交際をした。これが五右衛門には嬉しかったらしい。知己を得たような気持がした。で、非常に感激をして、この人のためなら死んでもよいと、そんなようにさえ思うようになった。

で、今度も常陸介から、伏見城の様子を探つてくれと、こう頼まれたのに直ぐに応じて、その役目を果たしたのであつた。

ところがもう一度伏見城へ忍んで、秀吉の寝首を搔いてくれという。——これには豪快な石川五右衛門も、考え込まざるを得なかった。

で、即答をすることが出来ない。腕を組んだまま黙っている。が、木村常陸介が、低くはあつたが凄愴の口調で、次のようなことを云つたがために、五右衛門は困難な常陸介の頼みを、むしろ勇んで引き受けた。

次のように常陸介は云つたのである。

「お前ばかりを死なせはしないよ。俺もおっつけ死ぬことになる。……お前の企くわだてが破れたならば、捕らえられてお前は殺されるだろう。……そうしてそれが聚楽第の、没落の原因となるだろう。

——太閤ほどの人物だ、聚楽からの刺客だと察するからさ。……
で伏見と聚楽とは、戦いをひらくことになるう。秀次公におかれ
ては、島津や細川へ金子を貢いで、誼よしみを通じて居るとはいつても、
いざ戦いとなった日には、伏見方へ従つくに相違ない。勝敗の数は
知れて居る。聚楽第は亡ぼされて、秀次公には自害されよう。従
つて俺も腹を切る。お前の後を追うことになる……がもしお前の
企が、成功をした場合には、天下はそれこそ聚楽第の、秀次公の
ものとなる。で今度の企はのるかそるかかの企なのだ。するとお前
は云うかもしれない、そういう危険な企を、どういう理由でやる
のか？ と、で、俺は答えることにしよう。どうやら我君秀次公
には、幸蔵主の甘言に乗せられて、太閤との不和をなだめるため

に、伏見の城へ出かけて行かれて、太閤のご機嫌を取られるらしい。その結果はどうなるか？ お前の云った通りになる。伏見城で詰腹を切らせられるか、ないしは途中で殺されるだろう。……それが俺には残念なのだ、同じくその身を失うにしても、太閤ほどの人傑を、向こうへ廻して戦って、華々しくご最後を遂げさせたいのだ。……で、道は二つしかない。太閤を守備よく弑しいするか、そうでなかったら戦うかだ。で、お前に俺は頼む。もう一度伏見城へ忍んでくれ、太閤の寝首を搔いてくれ、やりそこなったら死んでくれ！」

「わかった」と云うと五右衛門は、縁からユラリと腰を上げた。「末代までも名が残ろうよ。太閤の寝首を搔いたなら！ よしん

ば失敗をしたところで……」

云いすてると石川五右衛門は、木立を廻つて立ち去つた。

その足音が消えた時に、木村常陸介も立ち上つたが、思案にくれながら歩き出した。

「どうともして我君秀次公を、危険きわまる伏見の城へ、参第せぬようお諫めしなければならぬ」

行手に築山が聳えている。

裾を巡つて先へ進む。

と、泉水が堪えられていた。

廻つて主殿おもやの方へ進んで行く。

「はてな」と呟いて佇んだのは、厳しい聚楽第の石垣の上から、

武士姿の一つの人影が庭へ飛び下りたがためである。

「これは怪しい、何者であろう？」

常陸は首を傾げたが、

「伏見方の間者ではあるまいか？」

自分が五右衛門を刺客として、伏見城へやったおりからである。伏見方の間者ではあるまいかと、ふと考えたのは当然といえよう。

「よしよし後をつけてやろう」

で、足音を盗むようにして、常陸介は後をつけた。

曲者は顔を包んでいる。どうやら年は若いらしい。心が急せいで、走ると見えて、走るがように歩いて行く。主殿の方へ行くの

である。

「ああこれは間者ではない。ましていわんや刺客などではない。歩き方や態度で自ずとわかる。これは決して悪者ではない。とは云え聚楽第の武士ではない。おかしいなあ何者だろう」

心掛けの深い常陸介ではあつたが、これ以上は知ることは出来なかつた。

瞬間四人を討つて取る

曲者は先へ進んで行く。常陸介はつけて行く。次第に主殿へ近

づいて行く。

と、その主殿の方角から、四五人の武士が話しながら、あべこべにこつちへ歩いて来た。

「不破氏、不破氏、小四郎殿、そう憤慨をなさらないがよろしい。何も主命でござるからな」

一人の声が、なだめるように云った。

「さようさよう何も主命で」

相槌を打つ声が直ぐにした。

「それにさ、あれくらい女なら、この世間にはいくらでもござる。あの女はあのまま差し上げなされ。そうしてその代わりにご愛妾の一人を、頂戴なさるがよろしかろう」

「その方がいい、その方がいい」

また相槌を打つ声でした。

「たかが廻国にやって来て、京へ止まった田舎娘でござる。そのような女に未練をもたれて、殿下のご機嫌を取り損なったら、これほどつまらないことはない。おあきらめなされ、おあきらめなされ」

「さようさようおあきらめなされ」

四人目の声も相槌を打つ。

が、そういう取りなしに答えて、怨みと憤りに充ちたような、狂気じみた声が聞こえてきた。

「いやいやせつかくのご忠告ではあるが、それがし某においてはあきらめ

られん。……あまりと云えば横暴でござる！ 某より殿下へお願いしたところ、よかろうよかろう好きな女があるなら、余が懇望だと申して連れて来い。その上で其方そちにくれてやろう。——で、某は使者という格で、北畠家へ押して行き、あのお紅べにを引き上げて来た。……と、どうだろう殿下においては、これは以外に美しい。側室そばめの一人に加えよう。こう仰せられて手放そうとはされぬ。某を前に据えて置いて、お紅に無理強いに酌などさせる。寢所へ連れて行こうとされる。誰も彼も笑って眺めている。其のためにあつかおうとはしない！ 無体なのは殿下のやり口だ！ 庶民に對してはともかくも、臣下の某に對しての、やり口としては余りにひどい！ もはや某は聚樂じゅらくへは仕えぬ。ご奉公も今日限り。

浪人をする浪人をする！」

不破小四郎を取り囲んで、朽木三四郎、加島欽哉、山崎内膳、桃ノ井紋哉、四人の若武士が話しながら、こつちへ歩いて来るのであつた。

ところで彼らの話によれば、気の毒なことにはお紅という娘は、北畠家から奪い取られて、今、聚楽第にいるらしい。では主殿での夜遊の宴の、その中にも入っていることであろう。

不破小四郎と四人の武士とは、云いつのりながらなだめながら、次第にこつちへ近寄つて来る。

と、一所に木立があつて、そのの前までやつて来た時に、翻然と飛び出した人影があつた。同時に月光を横に裂いて、蒼白く閃

めくものがあつた。と、すぐに悲鳴が起こつて、朽木三四郎がぶつ仆れた。すなわち木立から飛び出して来た、覆面姿の侍が、先に立つて歩いて来た朽木三四郎を、抜き打ちに切つて斃したのである。

「曲者！」と叫んだのは加島欽哉で、太刀柄へ右手をグツと掛けたが、引き抜くことは出来なかつた。三四郎を斃した覆面の武士が、間髪を入れないで閃めかした太刀に、左肩を胸まで割られたからである。

「曲者！」とまたも同音に叫んで、山崎内膳と桃ノ井紋哉とが、左右から同時に切り込んで行つた。が、それとても無駄であつた。片膝を敷いた覆面の武士が、横へ払つた太刀につれて、まず内膳

が腰車にかけられ、ノツと立ち上った覆面の武士の、鋭い突きに桃ノ井紋哉が、胸を突かれて斃れたからである。

四人を瞬間に打って取った、覆面の武士の腕の冴えには、形容に絶した凄いものがあつた。

と、その武士がツと進んだ。

「小四郎！ 不破！ 極悪人め！ よくもお紅殿を奪つたな！

某こそは北畠秋安！ 怨みを晴らしにやって来た。お紅殿を取り返しにやって来た！ 観念！」

とばかり切り込んだ。

「出合え！ 曲者！」と叫んだが、不破小四郎は見苦しくも、主殿をさして逃げ出した。

「逃げるか！ 卑怯！ 何で遁そう！」

四人を切った血刀を、頭上に振り冠った秋安は、すぐに小四郎を追っかけた。

と、その眼前へ大兵の武士が、遮るようにして現われたが、威厳のあるドツシリとした沈着の声で、

「北畠殿と仰せられるか、まずお待ちなさるよう。某事は木村常陸介、子細は見届け承わってござる。悪いようには計らいますまい」

こう云うと手を上げて制するようにした。

廊下を渡る雪燈の火

現われた武士は誰あろう、聚樂^{じゅらくだい}第における第一の智謀で、かつは誠忠無双であつて、しかも身分は宿老であつて、その上性質は寛仁大度、この人一人があるがために、秀次の生命は保たれて居り、聚樂の生命も保たれて居ると、世評一般に云われて居るところの、木村常陸介と耳にするや、逸^{はや}り切つていた北畠秋安も、足を止めざるを得なかつた。

で、ダラリと刀を下げて、常陸介を見守つた。

「さて」と云うと常陸介は、一層物憂しい口調になつたが、なだめるように説き出した。

「貴殿のお父上秋元殿は、高朗としたお人柄で、それがし某も平素より尊敬いたし居ります。ご子息の貴殿のお噂も、兼々承わつて居りました。清廉潔白でおわすとのこと、これまた敬意を払つていました。……ただ今立ち聞きいたしましたところ、お紅殿とやら申される女子を、不破小四郎が理不尽にも、関白殿下のお旨と申して、聚楽の第へ連れて参り、それを怒られてご貴殿には、この嚴重の聚楽第へ、潜入して四人を討つて取り、なお小四郎を討ち取った上、更に主殿へ切り入つて、お紅殿を奪回なされようのご様子。……小四郎の不義は申すも憎く、関白殿下のなされ方も、よろしくないことと存じます。しかし」

とここまで云つて来て、木村常陸介は叱るようにつづけた。

「聚楽第には強^{つわもの}者もござる。貴殿お一人に荒らされるほどの、不用心のことは致して居らぬ！　あまりに自己をお頼みなさるな！　またそれほどにも聚楽第を、力弱きものとお思いなさるな！」

しかしまたもや優しくなり、慰めるような口調となった。

「余計なことは申しますまい。某をお信じなさりませ。某必ずお紅殿を、無垢の処女^{おとめ}として聚楽第から、貴殿にお返し致しますよう、安心して一先ずお引き取り下され、……四人の武士を討たれたことも、某秘密に取り行ない、貴殿にご迷惑のかからぬよう、葬むることにいたしましたしょう」

こう云われてみれば秋安には、押して云うべきことはなかった。なるほど主殿へ切り入ったならば、討って取られることであろう。

決死の覚悟で来たのではあつたが、殺されるのを望んでい
る。苦情を云うべき筋はない。しかも言葉を誓つたのは、他なら
ぬ木村常陸介である。充分に信頼してよかつた。

で、ひき上げることにした。

「ご芳志かたじ忝けのう存じます。ではお言葉に従いまして、立ち返る
ことにいたしました。つきましてはきつとお紅殿を……」

「大丈夫でござる、お案じなさるな」

「は」と恭しく一礼して、木立をくぐって北畠秋安は、忍びやか
に後へ引き返した。

しかし十足とは歩かない中に、一つの恐ろしい事件が起こつた。

酒宴をひらいている主殿の樓の、明るい華やかな笑声を縫って、悲痛極まる女の声が、一声けたたましく聞こえたかと思うと、一所の襖が仆されて、女の姿がよろめき出たが、欄干へ体をもたせかけると、そのままグツタリと動かなくなり、つづいて何物かが女の手から、秋安の足許へ投げられた。

秋安は驚いて小腰を屈め、投げられた物を取り上げて見た。

「九耀の紋の付いた懐刀だ！ 血にぬれている、血にぬれている！ ああお紅殿は自害なされた！ 常陸介殿！」

と、飛びかかるようにしたが、

「お紅殿は自害を致しましたぞ！」

「うむ」と云うと木村常陸介は、腕をしっかりと胸へ組んだが、

しばらくの間は黙っている。

と、グイと顔を上げたが、樓上の女の死骸を見た。四五人の人影が現われて、欄干に仆れている女の死骸を、屋内へ運んで行くうとしている。

と、木村常陸介は、にわかには頭を巡らしたが、主殿と並んで立っている、一字の奇形な建物を見た。その建物と主殿とを繋いで、長い廻廊が出来ていたが、その廻廊に青い燈火ひが、一点ユラユラと揺れながら、建物の方へ進んで行く。一人の侍こしもと女ごんぼりが雪洞をささげて、廻廊を進んで行くのであった。いやいやその女一人だけではなくて、その後につづいて四五人の侍女が、群像のように固まって、建物の方へ進んでいた。

「なるほど」と呟いたのは常陸介であつた。秋安の方へ顔を向け
たが、

「誓つた言葉に背きはしませぬ。処女おとめのままの娘として、お紅殿
をお返しいたしましたしやう。お信じなされ、お信じなされ」

そういう言葉には確信らしいものが、さも重々しく籠もつても
いた。

酒乱の関白

ちようどこの頃おもや主殿の樓の、華麗を極めた大広間で、関白秀次

が喚いていた。

「女は死んだか、自害したか、ワツ、ハツ、ハツ、それもよからう。死にたい奴は死ぬがよい。殺してくれなら殺してもやろう。たかが卑しい女一人だ！ 切ろうと縊くびろうと俺のままよ！ これこれ死骸を片付けろ！ 目障りだ目障りだ持つて行け！ ……さあさあ酒だ！ 酌をせい！ 今夜は徹夜で飲み明かす。お前達も飲め、俺も飲む」

蒼白の顔色、充血した眼、釣り上った眉、齒を剥いた口、これが関白たる貴人であろうか？ そんなようにも思われるほどに、すさみにすさんだ容貌である。髪を茶筌に取り上げて、練絹の小袖を纏っている。盃を握った右の手が、ブルブルと恐ろしく顫え

ている。瘡をつのらせている証拠である。

金泥銀泥で塗り立てられた、絢爛を極めた盃盤が、無数に立てられた銀燭に照らされ、蒔絵をクツキリと浮き出している。朱色に塗られた長柄の銚子が、次から次と運ばれて来る。床の間には黄金の香炉があつて、催情的の香の煙が、太い紐のように立っている。

「お那々なな、謡え！ 幸若こうわか、舞え！ 伴作ばんさく々々鼓を調べろ！」

またも秀次は喚き出した。

「……何を恐れる！ 天下人だぞ！ 何を遠慮する、関白だ！

一天四界俺の物だ！ 何を怯える、石田、増田に！ 巷の童どもわらべ

が悪口を云わば、用捨はいらない、切つてすてろ！ 妻妾の数三

十余人！　それがどうした、少ないくらいだ！　まだまだ美人を集めて見せる！　俺を殺生関白だという！　殺生ならぬ人間がどこにある！　政治に暗く人心離反し衆人俺を笑うという！　伏見の爺おやしが悪いからだ！　爺が政治を執っているからだ。で俺は飾り物だ！　虚器を擁しているばかりだ！　不平もあろう、淫蕩にもなろう、残忍にもなろう、酷薄にもなろう！　しかも関白をやめさせようとする。淀君の子を立てようとする。で、俺を迫害する！　僻むのは当然だ当然だ！　……騒げ、はしやげ、謡え、舞え！　京都の柔弱兒を驚かせてやれ！　注げ！　酒だ！　イスパニアの酒だ！　……安あんなん南、交趾こうしから献上した、紅玉色ルビーをした酒を注げ！　バタニア胡椒を酒へ入れろ！　さぞ舌ざわりがよいだろ

う。酔が烈しく廻るだろう。……ソレソレこぼれた酒がこぼれた！ スラスの懸布で拭くがいい。……鳥銃をもて、鳥銃をもて、往来の奴を撃つてやろう。象眼入の鳥銃がいい！ 暹羅しやむから献じたあいつがいい。……沈香で部屋をくゆらせろ、伽羅で部屋をくゆらせろ！ 龍涎香で部屋をくゆらせろ！」

金銀で飾った脇息に倚つて、秀次はのべつに喚き立てる。

座に列なっている妻妾や侍こしもと女や、近習役や茶道衆や、幸若太夫の面々は、顔を見合わせて黙っている。

たった今女が死んだのである。懐刀で自害をしたのである。で、すっかり怯かされている。その上に例の酒乱が出て、秀次の態度が兇暴になった。果たしてどうなることだろうか？ で、黙ってい

るのである。

狩野永徳の唐獅子の屏風、海うみ北きた友ゆう松しょうの牡丹絵の襖、定てい家か俊ゆん成せいの肉筆色紙を張り交ぜにした黒檀縁の衝立、天井は銀箔で塗られて居り、柱は珊瑚で飾られて居る。そういう華美の大広間も秀次の喚く兇暴の声で、ビリビリ顫えるばかりである。

と、秀次は眼を据えたが、一人の侍女へ視線を止めた。

「これこれ其方そちは何というぞ」

わたくしちなみ
「妾は千浪と申します」

オドオド顫えながら答えたのは、秀次の愛妾葛葉くすはの方が、この頃になつて召しかかえた、十七の処女おぼこらしい侍女であつた。

「千浪というか、よい名だよい名だ。参れ参れここへ参れ！」

愛妾の死

淫蕩とそうして兇暴の光を、その眼の中へ漂わせながら、こう秀次に呼びかけられて、千浪はいよいよ顫え出した。

「はい」と云ったものの近寄ろうとはしない。あべこべに葛葉の背後へ隠れて、体を縮めるばかりであった。

「何も恐れることはない。取って食おうとは云っていない。可愛がつてやろうと云っているのだ。参れ！ 厭かな？ 厭なことはあるまい」

秀次はヒヨロヒヨロと立ち上ったが、千浪の方へ歩き出した。

と、そういう様子を見て、血相を変えた女がある。他ならぬ愛妾葛葉の方で、かばうように千浪を蔽うたが、

「許しておやり遊ばしませ。まだこの子はほんの処女で、可哀そうな子にござります」

しかし葛葉の顔にあるものは、決して同情や愛憐ではなくて、むしろ自分の寵愛を、侍女こしもとの千浪に横取られることを、恐れて案じているところの、妾めかけらしい嫉妬の情であった。

「ナニ処女、ははあそうか」

秀次はカラカラと笑ったが、

「一層よいの、処女に限る。……其方そちは幾年いくつだ？ 二十九だった

かな。年から云つても盛りは過ぎた。もう俺には興味はない。：
代りに千浪をよこすがよい」

秀次はなおもヒヨロヒヨロと進む。

あれ！ というように声を上げて、千浪が立つて逃げ出したところを、飛びかかつて秀次は小脇に抱いた。

「もがけもがけ、あばれるあばれる、そのつどお前の軟かい肌が、俺の体へぶつかるばかりだ！ 小鳥よ、捕らえた！ 可愛い色鳥！」

ズルズルと引き立てて行こうとした。

その秀次の両の足を、しっかりと抱いた者があつた。やはり葛葉の方である。

冷やかに秀次は睨んだが、

「嫉妬か！」

「上様！」

「邪魔をするか！」

「はなしておやり遊ばしませ」

「其方そちこそ放せ！ 手を放せ！」

「上様、お慈悲にござります」

「ふん」といかにも憎々しく、秀次は鼻を鳴らしたが

「先刻さつき自害をした女のように其方も自害をしたいそうな」

「いつそお手にかけて下さりませ」

「望みか！」と云うと秀次は、ドンと片足を持ち上げたが、ウン

とばかりに蹴仆した。

と、悶絶をする声がした、胸を蹴られた葛葉の方は裾を乱して伏し転んだ。

一瞬間のざわめきの起こったのは、座に侍^{はべ}っていた妻妾や近習が、一時に動揺したからであつた。その動揺が静まると、反動的の静けさが、大広間一杯に拡がった。

「今夜はこれで二人死んだ。おそらくまだまだ殺されるだろう。殺せ殺せ、目茶苦茶に殺せ！ 聚楽の栄華も先が知れている」

こう呟いた者があつたが、刺^{ぬいとり}繡の肩衣に前髪立の、眼のさめるような美少年であつた。美童は不破^{ふわ}伴作^{ばんさく}であつた。

狂人じみた目付きをして、秀次は大広間を見廻したが、

「目障りになる！ 片付けろ！ 死骸は厭だ！ 井戸へでも沈めろ！」

それから千浪を引きずったが、

「今夜の伽とぎだ！ 嬉しそうに笑え！」

で、襖を開けようとした。

と、その襖が向こうから開いて、

「孫七郎様」と云う声が聞こえてきた。優しくて穏かではあつたけれど、威厳のある老女の声であつた。

つと立ちいでた人物がある。

円頂黒衣鼠色の衣裳、手に珠数をつまぐつている。眉長く鼻秀で、額は広く頤は厳しい。澄んではいるが鋭い眼、頬に無数の皺

はあるが、かえつて顔を高貴にしている。

これこそ女傑こうぞうす幸蔵主であつた。

「相変わらずのお悪戯いたでござりますか」

あたかも子供でもあしらうように、こう秀次に云いかけたが、咎めるような調子はなくて、なだめるような調子があつた。そうしてそれが大広間の殺気と、秀次の兇暴の心持とを、平和な甘いものにした。

「幸蔵主の姥か」と鼻白んだように、秀次は千浪の手を放したが、
「俺わしはな心が寂しいのだよ」

云い云い元の座へ押し坐つた。

と、幸蔵主も膝を揃えて、秀次の前へ坐つたが、手を上げると

大広間を撫でるようにした。立ち去れという所作なのである。

これで助かったというように、座に並んでいた妻妾達が近習の武士達と立ち上って、一整に姿をかくした後には秀次と幸蔵主ばかりが残された。

能弁の幸蔵主

しばらく幸蔵主は秀次の顔を、まじろぎもせずに見ていたが、いかにもいたわしさに堪えないように、いたわるように話しかけた。

「妾が聚樂へ参りましてこの方、繰返し繰返し申しましたが、まだご決心が付きませぬそうな。よくないことでござりますよ。早うご決心をなさりませ。伏見へおでかけなさりませ。そうしてご弁解なさりませ。太閤殿下と貴郎様とは、血縁の伯父姪ではございませぬか。親しくお二人がお逢いなされて、穩かにお話をなさいましたら、疑いは自然と解けましよう。ご謀反を巧まれたというのではなし、ただ少しご身分柄として、ご酔興の程度が過ぎるといふ、それだけのお咎めではござりませぬか。恐ろしいことなどはござりませぬ。何の何の恐ろしいことなどが。……本来このような場合には、伏見からお呼びのない前に、貴郎様から参られて、お咎めの故以いわれのないということをお申しひらきなさるの

が、本当なのでござりますよ。しかるに今回はあべこべとなつて、伏見から参れとのご誼があつても、貴郎様には参られようともなされぬ。これではいかな太閤様でも、ご立腹なされるでござりましょう。と、……云いまして今のところでは、太閤様のご立腹とて、大したものではござりませぬ。お逢いしてお詫びをなされましたら、直ぐにも融けるでござりましょう。決してご心配には及びませぬ。が、只今の機会を逃がして、伏見へおでかけなされぬようなら、それこそ一大事になりましょう。あの治部様や長ながも盛り様が、あの巧弁で讒言などして、太閤様のご聡明を、眩まさないものでもござりませぬ。そうして貴郎様のお嫌いの、淀様などがそこへつけ込み、姦策を巡らさないものでもなく、何やら彼

やらの中傷が入って、今度こそ本当に太閤様のお心持が貴郎様から離れて、貴郎様をお憎みなされようも知れぬ。が、是非ともこの機会に、伏見へおいでなさりませ。……あるいは貴郎様におかれましては、秀頼公ひでよりぎみに太閤様が、豊臣の筋目や関白職を、お譲りなさろうと覚し召して、それで貴郎様を伏見へ呼び寄せ、殺すのではあるまいかと、ご懸念遊ばすかも知れませぬが、何の何の太閤様が、そのようなお腹の小さいことを、どうしてお企てなさりましょう。そのご心配には及びませぬよ……」

と、ここまで云って来て幸蔵主は、繊細微妙な笑い方をしたが、「お疑いさえ晴れましたら、貴郎様には直ぐにもご帰洛、ここ聚楽第の主として、いぜんとして一ノ人関白職、どのような栄華に

でも耽けられます」

この言葉が何よりも秀次の心を、強く烈しく打ったようであった。

「幸蔵主の姥！」とじつとなつたが、

「伏見へ参つてお詫びさえしたら、俺は聚楽へ帰られようかな？
現在の位置に居られようかな？」

「妾をお信じなさりませ。孫七郎様の昔から、膝へ搔き上げてご介抱をした、この幸蔵主ではござりませぬか。今はお偉い関白様でも、妾の眼から見ますれば、可愛らしい和兒わこ様でござります。

そういう可愛らしい和兒様に何で嘘など申しましょう」

「行こう行こう、伏見へ行こう！」

子供のよう^にに他愛なく、こ^う秀次は甘えるよう^にに云つた。

「俺にもお前は懐かしい。母者人ははじやびとのような気持がする。俺はお

前の云う通りになろう」

「ようご決心なされました」

「伏見へ行こう！ 明日にも行こう」

秀次は決心をしたのである。

と、幸蔵主の眼の中へ、憐愍の情がチラツイたが、直ぐにさり気なく消してしまった。

二人はしばらく無言であつた。

と、聚楽第の一所から、人が斬られでもしたような、悲鳴が一
声聞こえてきた。

不意に立ち上った幸蔵主は、スルスルと、欄干そばの側へ行つた。

で、悲鳴のした方を見た。

主殿おもやと廻廊でつながれている奇形な建物の方角から、どうやら

悲鳴は聞こえたらしい。

で、そつちへ眼をやつたが、

「今夜はこれで三人斬られた。……それにしても奇形な建物は、何を入れて置く建物なのだろうか？」

この部屋は？

奇形な建物の内部の一間で、老婆が喋舌りながら歩いている。

「最初は誰も彼もがんばりますよ。でもこの部屋へ押し入れられて、ものの五日と経たないうちに、大概は往生をしますよ。そうして今度は自分の方から、懇願をするようになりますよ。お側へ行かせて下さいましと。……だからお前様におかせられましたも、もうもうそれこそ間違いなく、この部屋をお出し下さいまし、関白様のご寢所へ、お連れなすつて下さいまし、男の肌、男の匂い、男の力、男の意志、それが欲しゅうござりますと、有仰ること
でござりましょうよ。まあまあ出来るだけご随意に、強情をお張りなさりませ。強情が強ければ強いほど、要求も強くなりましよう。……そうしてお前様の要求が、強まれば強まるほど、関白様

は喜ばれますので。……お前様は飛び付いて行きましょう。関白様は引つ抱えましょう。……それから幸福になりますので。はい、はい、関白様もお前様も！……これまで一度の間違いもなく、そうなったのでございますよ。ほんとにこれまで幾十人の娘が、この部屋の中へ入れられて、そうして愛慾の餓鬼となつて、飛び出して行ったことでもござりましょう。……でもお気の毒でござりません。この部屋へ入つて出て行つて、愛慾を遂げた娘たちは、愛慾を遂げたその後では、九分九厘狂人になりました。一時に遂げた歡樂の力が、その人達を疲労させて、そうさせたのでござりましょう。……たしかお紅殿べにと有仰いましたな、お紅殿遠慮はいりませぬ。ご馳走をお食べなさりませ。風呂へお入りなさりませ、

香水をお浴びなさりませ。床へお伏せりなさりませ。そうしてお眠りなさりませ。今夜が過ぎて明日にでもなったら、効験が現われるでござりましょう。……それでは妾は他のお部屋の、他の女の人達を、見廻つて来ることにいたしましょう」

六十あまりの老婆である、脂肪肥りに肥っている。胡麻塩の髪の毛、刺のような鼻、おち窪んだ眼、皮肉な口、それが老婆の風采である。

部屋の朦朧とした光に照らされ、妖怪じみて立っている。

その部屋の様の艶妖なことよ！　そうして異国じみていることよ！

部屋の一所に浴槽があつて、淡黄色の清らかな湯が、滑石の浴

槽の縁をあふれて、床へダブダブとこぼれている。その傍らの壁の高所に、銀製の漏斗型の管があつて、そこから香水の霧水沫が、絶間なく部屋へ吹き出している。が、浴槽は呂宋織りらしい、男女痴遊の浮模様のある、垂布の向う側にあるところから、ハツキリ見ることは出来なかつた。更に部屋の一所に、一人寝の寝台が置いてあつた。張られてあるのは天鷲※であつて、深紅の色をなしていた。が、尋常の寝台ではなく、一度その中へ寝ようものなら、リズムをもつて上下へ動き、寝ている人の愛慾を、自然にそそるように出ていた。寝部屋の天井に描かれてあるのは、曲線ばかりの模様であつた。

.....

そういう連想を見る人の心へ、起こさせるように出来ていた。が、その部屋もバタビヤ織りらしい、これも深紅の垂布によつて、入口を蔽われているがために、ハッキリと見ることは出来なかつた。

お紅の坐っている部屋のつくりには、これといつて特異なものはなかつた。

ただ天井から下っている、珊瑚と鋼玉と爐眼石とで、要所要所を鏤められた、朝顔型のアレ ज्या 龕が、朝顔型に琥珀色の光を、床の上へ一ぱいに投げていた、その光に照らされて、幾個かの異国的の食器の類が、各自めいめいの持つてゐる色と形とを、いよいよ美しく見せて居るのが、いちじるしい特色ということが出来る。

尖形のギアマンの水注がある。そうしてその色は紫である。盛られているのは水だろうか？ 喇嘛僧形らまそうの薬壺がある。そうしてその色は漆黒である。どのような薬が入っているのでしょうか？ 錫製の椀には獣肉が盛られ、南京産らしい陶器の皿には、野菜と魚肉とが盛られてある。

そういう器類を前にして、坐っているお紅の姿というものは、むごたらしいまでに取り乱していた。髪はほどけて顔へかかり、裾は乱れて脛はぎを現わし、襟はひらけて乳房を見せ、一方の袖が引き千切れて、二の腕があらわに現われている。その腕を烈しく握られたからであろう、一所黒痣が出来ている。

さながら人魚

お紅の心は乱れていた。思い乱れているのである。今日一日の出来事が、夢かのように思われてならない。

——秀次公の使者として、不破小四郎がやって来たこと、聚じゅうら楽くだい第へやるまいと北畠一家が、最初はげしく争ったこと、とうとう聚楽第へ連れて来られて、眼を奪うような華やかさと、胆を冷すに足るような、荒淫な夜遊にぶつかつたこと、秀次が自分を抱えたこと、それに対して抗つたこと、でもズルズルと引きずられたこと、その時懐刀の落ちたこと……最後に気絶をしたことな

ど……

「ここはどういう部屋なのであろう？」

お紅は四辺あたりを見廻して見た。

いつか老婆は立ち去ったと見えて部屋には誰もいなかった。

「まるで異国へでも来たようだよ」

見る物が驚きの種であった。

「正氣づいた時にはこの部屋にいた。変なお婆さんが何か云った。

一言もわたし妾には解わからなかつた」

お紅は空腹を感じて来た。人が氣絶から醒めた時には、空腹を感じるものである。

「妾に下された食物なのであろう。では妾は遠慮なく食べよう」

で、お紅は手を延ばして、順々に食物を食べて行つた。

「ああ妾は咽喉のどが乾いた。水注の水を飲むことにしよう」

で、咽喉うづるを潤おした。

しかしお紅は知らなかつた。それらの食物や水の中に、愛慾を
 そそる××質が——麝じゃこう香とか、芫けんか花とか、禹うりよう余糧とか陽よう起きせ
 石きとか、狗背くはいとか、馬兜鈴ばとれいとか、漏蘆ろろなどというそういう××
 質が、雑ぜられてあるということ。

ただお紅は飲食をしたため、にわかには体が活々となり、元氣づ
 いて来たということと、恍惚うつつりとした甘い氣持が、心に湧いたと
 いうことを、感ずることが出来たまでであつた。

「体が汗にぬれている。妾は風呂へ入ることにしよう」

で、お紅は立ち上ったが、念のために部屋の中を見廻してみた。が、誰も見ていない。

で、そろそろと帯を解いて。一枚々々衣装を脱ぐ、花の蕾が萼から花卉と、——一枚々々、一枚々々と——だんだんほぐれて行くようである。

と、雌蕊が現われた。処女の肉体が一糸も纏わず、白く艶々とむき出されたのである。

余りに清浄であるがために、たとえ誰かが見ていたとしても、何らの邪心さえ起こさなかつたであろう。そんなにもお紅の裸体の姿は、清らかで美しいものであった。そうしてお紅のその裸身が、呂宋織りの垂布ルソンを左右にひらいて、浴槽の部屋へ消えた後に

は、脱ぎ捨られた紅紫の衣装が、散った花のように残されていた。そうしてその頃にはお紅の裸身は、浴槽の中に埋もれていた。例えることが許されるなら、浴槽の中の緑色の湯は、紺碧をなした潮であり、それに埋もれている裸体のお紅は、若い美しい人魚でもあろうか？

まさしく人魚に相違なかった。乳房から上を、潮から乗り出し、肩の上へ黒髪を懸けいている。快く閉ざした眼の瞼の、上気して薄紅く艶めかしいことは！ポツカリと唇を無心にあけて、前歯の一部分を現わしている。それがやはり艶かしい。

と、お紅は立ち上ったが、浴槽を出ると蹣跚よろめくように、香水管の下まで行って、起立したまま静まった。裸体から滴がしたたり

落ちる。裸体を香水の霧が蔽う。斑ふのない大理石の彫像を、繭から出たばかりの生絹が、眼にも入らない細さをもつて、十重に二十重に引つ包み、暈しているのではあるまいかと、そんなようにも見え做される。

だがお紅は知らなかった。浴槽の緑の湯の中に、熏くん陸りく、烏う薬やく、水銀すいぎん郎ろう等の、××質が入れてあつたことを。

そうしてさらに知らなかった。管から吹き出している香水の中に、馬ば牙が硝しょう、大たい腹ふく子し、杜と仲ちゆうなどの、同じく××的香料が、まぜられてあつたということ。

いつまでもお紅は陶然として、香水の霧に巻かれている。

しかしそれから体を拭つて、垂布をくぐつて前房へ出て、そう

していぜんとして一糸も纏わず、バタビヤ織りの垂布をひらいて、寝部屋の中へよろめき込み、寝台へ体を横仆えて、桃色の薄布を一枚だけ懸けて、ウトウトと眠りに入った頃から、身内の血潮が騒ぎ立ち、………、………、追っかけ追っかけ上ぼって行くのを、堪えることが出来なかつた。

漁色の動物

「ああ^{わたし}妾はどうしたんだらう？　こんな気持になつたことは、それこそ産れて初めてだよ」

薄^{うすぎぬ}衣の下で身もだえをした。桃色の薄衣が裸休に準じて、蠱

惑的の襞を作っている。胸の辺りが果物のように、両個ムツチリ盛り上っていたが、乳房がその下にあるからであった。下腹部の辺りが円錐形に円^{まる}く、その上を蔽うている薄衣の面が、ピンと張り切って弛みのないのは、食物を充分に食べたがために、事実お腹が弾力をもつて、張り切っているがためであろう。延ばされた左右の脚の間が、少し開けていると見える。そこへ掛けられた薄衣の面が、深い窪味をこしらえている。薄衣は咽喉までかかっていたが、その薄衣から抽^{ぬきで}たところの、顔の表情というものは、形容しがたく艶麗であった。と、その顔を抑えようとしてか、薄衣の縁から両腕を延ばし、肘から湾のように丸く曲げたが、直ぐ

てのひらに掌で顔を抑えた。と、脇下の可愛らしい窪味が、きわだつて黒く見て取れた。

烈しく喘いでいるらしい。胸から胴から下腹部から、延ばされた二本の脚の方へ、うねり 蛇のようなものが伝わって行く。のた打っている爬虫類さながらである。

そういうお紅を載せているところの、びろうど 天鷲※張りの異国風の寝椅子は、さつき 先刻から絶間のないリズムをもって、上へ下へと揺れている。

お紅の心へ萌したものは、異性恋しさの心持であった。

その異性の対象は、最初は北畠秋安であった。

「わたし 妾……………！ 妾……………！！」

で、若々しい健康らしい、秋安の肉体を描いてみた。

「妾はあのお方と約束をした。行末夫婦めおとになりましょうと。……

おいで下され！ おいで下され！ そうして妾を愛撫して下され

！」

次第に心が恍惚として来る。全身が鞣めされ麻痺されて来る。

処女心おとめが失われようとする。

「ああ妾には誰でもいい」

不健全で好色で惨忍な、秀次の顔が浮かんで来た。

と、秀次に………甦って来た。ちつとも穢わしく思われない。

ちつとも厭らしく思われない。今は全く反対であった。………

希ねがっていた。

だがその次に浮かんで来たのは、不破小四郎の姿であった。

「今直ぐ妾へ来て下さるなら、……………！」

美しくはあったが上品ではなかった。——そういう不破小四郎の顔が、お紅には上品に見えさえた。

「ああ妾はあの人にだって……………！」

寝台がリズムカルに揺れている。

お紅の全身は汗ばんで来た。呼吸が……………。薄衣の下の肉体が……………。

で、この寝部屋の寝台の上に、……………裸形の女は、決してお紅ではないのであった。単なる漁色の動物であった。つつましい清浄なお紅という処女は、ほんの少し前に消えたのである。

しかし漁色の動物は、お紅一人ではないのであった。

あの近東の回教国の、密房に則って作ったところの、この奇形な建物の内には、同じような部屋が幾個いくつかあって、その部屋々々には漁色狂の女が、無数に籠められて居るらしい。その証拠には四方八方から、極めて遠々しくはあつたけれど、………を柱へでも投げつけるらしい、物の音などが聞こえてきた。

みだらな唄声なども聞こえてくる。

だがお紅には聞こえなかった。

掻きむしられるような………が、身心をメラメラと焼き立てる。その………を消し止めようと、お紅は夢中で争っている。

しかし絶対に勝ち難かった。次第々々に負けて来た。とうとう

お紅は打ちのめされた。

「妾は………！ 最初に来た人へ！」

桃色の薄衣を退け^のようとする。そうしてお紅は立ち上ろうとした。そうしてお紅は叫ぼうとした。

「お婆さんお婆さん出して下さい！ そうでなかったら連れて来て下さい！」

で、お紅は泣き出した。

で、もし誰か異性の一人が、ここの寝部屋へ入り込んだならば、お紅は………を失うであろう。

そうして今やそういう異性が、奇形な建物の出入口の前へ、ひそかに姿を現わした。

他ならぬ不破小四郎であつた。

出入口の前に扉がある。内部が嚴重にとざされている。その前に立つた小四郎は、四辺あたりを憚つたひそやかな声で、

「姥はいるか、四塚の姥は！」

こう呼びかけて聞き耳を立てた。

光消えぬ矣篡奪星

と、扉の向こう側から、老婆の声が聞こえてきた。

「四塚の姥はこの妾わたしで。……何かご用でもござりますかな？」

嘲笑っているような声である。

「俺わしはな、小四郎だ、不破小四郎だ」

「お声で大概わか判りますよ。小四郎様でござりましょうとも」
嘲笑っているような声である。

「姥か、お願いだ、扉をあけてくれ」

するといよいよ嘲笑いの声を、四塚の姥は扉の中で立てたが、

「これはこれは何を有おっしや仰るやら、聚楽第じゅらくだいのお侍でありながら、

聚楽第の掟をご存知ないそうな。この密房は男禁制、開けることではござりませぬよ」

「何を、莫迦な、そんなことぐらい、この小四郎が知らないものか。知っていればこそ頼むのだ。是非この扉をあけてくれ。そう

してお紅に逢わせてくれ。……お紅という娘はいるだろうか？」

「ハイハイおいででござりますよ。今頃はねんねでござりましよう。いいご機嫌でな。夢中でな」

「お紅は俺の女なのだよ。それを殿下が横取ったのだよ。いやいや横取ろうとしているのだよ。で、この密房へ入れたのさ。……だがお紅は俺のものだ。渡してくれ、渡してくれ！」

懇願的の声となった。

「あの娘は本当に美しい女だ。聚楽中にもないくらいだ。で、ご愛妾の一人が死んだ。お前も知って居る京極のお方だ。今日まで殿下のご寵愛を、一人占めにして占めていられた方だ、そのお方が懐刀で自害された。お紅の懐^{ふところ}中から転び出た刀で、まるでお紅

が殺したようなものだ。いや事実殺したのだ。お紅を嫉妬して死んだのだからな。お紅がご愛妾になろうものなら、寵愛を失うと思つたからさ。……そんなにも綺麗なお紅なのだ。俺だつて恋しく思うではないか。頼む、あけてくれ、扉をあけてくれ！」
更にそれから誘惑するように。

「が、勿論頼むには、頼むだけのことはずるつもりだ……殿下から拝領の生絹をやろう、殿下から拝領の羅紗布をやろう、殿下から拝領の紋唐革をやろう。もしお前が欲しいというなら、刺繡した黒一天鷲^{ビロード}※をくれてやる。黄金をやろう、背負いきれないほどの黄金を！」

どうやら最後のこの言葉は、四塚の姥をまどわしたらしい。

しばらくの間は黙っていたが、諂うように声をかけた。

「黄金を下さると有仰るのです？」

「やるよやるよ、背負いきれないほどやるよ」

「まあまあ左様でござりますか、考えることにいたしましたしょう。

妾はすっかり老い枯ちて居ります。この女部屋の宰領役さえ、わずらわしいものになりました。どうぞ閑静な土地へ参つて、安楽なくらしをいたしたいもので。それにはお宝が^い入りますので。

……^{あなた}貴郎様がそれを下さるといふ。有難いこととござりますよ。

ではこの扉をあけましょう。ご自身にお入りなさりませ。ご自身に寢部屋へ参られませ」

すぐにカチカチと音がした。どうやら錠でもあけるらしい。

「有難い有難い礼を云うぞ。そうしたら俺はお紅を連れ出し、遠く他国へ行くことにしよう。そうしてそこで一緒に住む」

やがてギーという音がした。

と、扉が一方へあいて、先刻方お紅の部屋さつきに在って、お紅に因果を含めていた、老婆が顔をつき出した。すなわち四塚の姥である。

「お入りなされ」

「もう占めたぞ！」

だがその時どうしたのであろうか、四塚の姥は、

「あツ」と云ったが、ビ——ンと扉をとじてしまった。

主殿おもやとつながれている廻廊を、一つの人影が迂るように、こつ

ちに近寄つて来たからである。

「小四郎！」

「おツ、ご宿老様！」

「不忠者！」

か——ツと一太刀！

悲鳴が起こつて骸が斃れた。

幸蔵こうぞうす主が樓上で耳にしたのは、この小四郎の悲鳴なのであつた。

「四塚の姥！ 扉をあけろ。……うむ、開けたか、顔を出せ。……

……お紅という娘が居るはずだ。丁寧にあつかつて連れて参れ」

「かしこまりましたござります」

密房の扉があげられている。

砂金色の燈火ともしびが隙から射して、廊下を明るく照らしている。

血刀を下げて突っ立っているのは、宿老の木村常陸介であった。足許に死骸が転がっている。一刀で仕止められた小四郎の死骸で、肩から胸まで割られている。

切口から流れた血が溜まって、廊下へ深紅の敷物でも、一枚厚く敷いたようであった。

「聚楽の乱脈はこの有様だ。とうてい長い生命いのちではあるまい。…頼むは五右衛門ばかりだが……」

懐紙で血刀をゆるゆるとぬぐい、鞆へ納めた木村常陸介は、廻廊の欄干へ体をもたせ、奥庭の木立の頂き越しに、伏見の方の空

を見た。

「これは不可いない、仕損じたらしい」

公孫樹いちようの大木の真上にあたって、五帝星座がかかっていて、玄中星が輝いていたが、一つの篡奪星が流星となって、玄中星を横切ろうとした。

が、そこまで届かないうちに、消えてなくなってしまったからである。

「可哀そうに五右衛門は捕らえられたらしい」

一年後の花園の森

こうして一年の日が経った。

その間に起こった事件といえ、聚楽第の主人の秀次が、高野山で自害をしたことであろう。

木村常陸介をはじめとして、家臣妻妾が死んだことであろう。

石川五右衛門が四條河原で、釜茄にされたことであろう。

で、春が巡って来た。花園の森には松の花が咲き、桜の花が散り出した。そうして、麦の畑では、鶉うずらがヒヒ啼きを立てはじめた。

そういう花園の森の中に、三人の男女が坐っていた。香具師こうぐし姿の男女である。一人はその名を梶右衛門と云って、六十を過ぎた老人であり、一人はその名を梶太郎と云って、その老人の子で

あつた。二十三歳の若者である。そうしてもう一人は萩野であつた。香具師姿の萩野であつた。

「若い者同志は若い者同志、話をするのが面白かろう。どれどれ俺は見廻つて来よう。……奴らあんまり騒ぎ過ぎるて」

森の奥に大勢の仲間がいて、陽気にはしゃいでいると見えて賑かな喋り声しゃべが聞こえていたが、梶右衛門親方は腰をあげると、元気よくそつちへ歩いて行つた。

で、軟かい草を敷いて、ここの境地へ残つたのは、梶太郎と萩野と二人だけであつた。

昼の日が森へ差し込んでゐる。その日に照らされた梶太郎の顔は、流浪の人種の若者などとは、どんなことをしても思われない

ほどに、上品でもあれば純情でもあった。しかし種族は争われな
いで、情熱的なところがあつた。

じつと萩野を見守っている。烈しい恋の感情が、眼にも口にも
漂っている。

梶太郎は事実燃えるがようにも、萩野を恋しているのであつた。
そうして幾度か打ち明けもした。しかし萩野はそれに対して、ハ
ツキリした返事をしなかつた。と云つて萩野は衷心において、梶
太郎を嫌っていないばかりか、仄かながらも愛していた。とは云
えそれよりも一層烈しく、萩野は秋安に恋していた。未練を残し
ていたのである。そうして過ぐる日その本心を、とうとう梶太郎
の耳へ入れた。どんなに梶太郎の失望したことか！これが普通

の香具師の、兇暴な若者であつたならば、自暴自棄の感情の下に、萩野に対して暴力を揮うか、ないしは秋安を殺そうとして、付け狙つて姦策を巡らしたであろう。しかし梶太郎は、反対であつた。自分の恋を抑え付けて、萩野を故郷へ送り届けて、秋安の手へ渡そうとした。ちようどその頃香具師の群は、丹波の亀山に居たところから、そこを引き払つて一年ぶりに、この京の地へ来たのである。

この花園の森の近くに、秋安の邸はあるのだという。そうして日が暮れて夜が来た時、萩野は香具師の群から別れて、秋安の邸へ行くのだという。——では二人での話し合いは、今が最後と見做さなければならぬ。

どんなに梶太郎の心持が、暗くて寂しくて悲しいか、云い現わすことさえ出来なかつた。

しかし萩野の心持も、同じように寂しく悲しかった。一年前の月の夜に、この森で首をくくろうとして、野宿をしていた梶右衛門のために、あぶないところを助けられてこのかた以来、香具師の群の中へ投じて、諸々方々を流浪したが、その間にどれほど梶太郎のために、愛されいたわられ大事がられたことか。云い尽くせないものがあつた。その人と別れなければならぬのである。同じように寂しく悲しかつた。

二人はいつ迄も動かない。

ところで萩野の心の中には、さらに別の不安があつた。

「秋安様には薄情な妾を、わたしお許しなすつて下さるかしら？——そうしていまだにこの妾を、昔どおりに愛して下さるかしら？」——と云うのが萩野の不安なのであった。

しかるに萩野のそういう不安は、全然別途の趣の下に、以外に解決が付けられることになった。

ああ二組の幸福の夫婦

数人の男女の話し声が、森の一方から聞こえてきたが、次第にこつちへ近寄つて来て、間もなく姿を現わした。一人は北畠秋安

で引き添うようにして美しい婦人が、——それは他ならぬお紅であつたが、侍女を従えて歩いて来た。二人はどう見ても夫婦であつた。そうして事実夫婦なのであつた。その証拠さえそこにある、侍女が嬰兒うぶごを大切に、胸の辺りに抱いている。

話しながらゆるゆると歩いて来る。

「今年も松の花が咲くようになった。思い出の多い松の花だ。この森にも思い出が多い。……あれからあの女はどうしたことやら」

感慨にたえないというように、秋安はしめやかに呟いたが、

「どこぞで幸福にくらして居ればよいが」

「萩野様のことでございますか？」

「こうお紅は訊き返したが、」

「もうどうやら貴郎様あなたには、怨みも憎しみもなくなられたようで」

「今では幸福をいのるばかりだ。……これもお前のお蔭なのだよ」

「まあまあ何故でござりましょう？」

「お前が俺と一緒にあって、俺を幸福にしてくれたからだ」

「もう愛しても居りませぬので？」

「愛するものはお前ばかりだ」

「いいえ、そうしてこの秋秀も」

こう云つてお紅は笑えましそうに、嬰兒の方へ顔を向けた。

「可愛い坊や、可愛い坊や……妾は幸福でござりますよ」

「自分で幸福にいる時には、他人の幸福も願うものだよ。……萩野が幸福であるように」

「可愛らしい香具師さんが居りますのね」

こう云つてお紅が足を止めたので、秋安もふと足を止めた。

そうして萩野へ眼をやつたが、萩野はその前から、深く俯向いていたがために、秋安には顔が見られなかつた。そうして姿は香具師風である。萩野であることが何で判^{わか}らう。で、ゆるゆると行き過ぎた。

が、お紅は気安そうに、二人の香具師の前まで行つた。

「お怒りなすつては困ります。私達は幸福なのでございます。どうぞ貴^{あなた}郎方ご夫婦にも、祝つていただきたくと存じます。粗末な物ではござりますが、私達の志でござります。お受け取りなすつて下さいまし」

云い云いお紅は簪を抜いたが、萩野の前へそつと出した。

「はい、有難う存じます」

顔を上げた萩野の眼の中に、あふれる涙が光っていた。

「お美しい貴郎様のお志、いつ迄も忘れはいたしませぬ。……幸福におくらし遊ばすよう、おいのり致すでござりましょう」

「貴郎方ご夫婦もお幸福に……」

施しを快く受けられたので、お紅は喜悦を感じたらしい。ちよつと会釈すると身をひるがえして、行き過ぎた秋安の後を追って灌木の裾を向こうへ廻った。

と、じいいつとその後を、萩野は涙の眼で見送ったが、突然梶太郎の膝の上へ、しっかりと、顔を押しあてた。

「ねえ行きましようよ、遠い他国へ、流浪しましようよ、二人で一緒に！」

そうして烈しく咽び泣いた。

「……………」

茫然とした若者の梶太郎には、何故そうもにわかには萩野の心が、一変したかが解わからなかつた。それは實際解らなかつたが、一緒に流浪をしようという、萩野の心は嬉しかった。嬉しい以上に有難かつた。

「萩野さん、私はお礼を云うよ。ああ行こう、一緒に行こう。…
…そうしてお前さんは私のものだ」

「貴郎のものでございますとも！　ただ今の若い美しいお方も、

祝福をして下さいました。……私達二人を！ 夫婦と見做して！」

「私の妻だ！」と抱きかかえた。その梶太郎に抱かれたままで、萩野はうつとりと呟いた。

「あの人達は京都みやこに住む！ 賑やかな明るい派手やかな京都に！
そうしてそこでお暮らしになる。幸福に、幸福に、幸福に！

……でも私達は林や野や、小さい駅うまやじゆくや宿で住む！ でもちつとも
違いはない。幸福にさえ暮らそうとしたら……きつと幸福にくら
すことが出来る！」

「わしは今でも幸福だよ、たった今わし私は幸福になった。……しか
し、お前には、秋安というお方が……」

「何にも有おっしや仰おつて下さいませ。……もう逢ったのでございま

す。……逢つたも同じなのでございます……」

拭くに由無い満眼の涙！ 萩野の眼頭から流れ出たが、頬を伝わって頤まで来た。昔の恋を思い断つて、新しい恋に生きようとする、悲しみと喜びの涙なのである。

花園の森は昼の日に明るく、草木と人とを照らしている。その中で桜花が蒸されている。

が、間もなく森の中から、十数人の香具師達が、流浪の人に特有の、軽快な自由な足どりで、笑いさざめきながら現われた。

近江をさして行くらしい。

その先頭に歩いて行くのは、新婿新妻を想わせるところの、梶太郎とそうして萩野であった。

肩と肩とを寄せ合って、つつましやかに歩いて行く。

野には陽炎、小鳥の声々！　そうして行手にあるものは、新しい恋と生活とである。

青空文庫情報

底本：「国枝史郎伝奇全集 卷五」未知谷

1993（平成5）年7月20日初版

初出：「講談倶楽部」

1928（昭和3）年8月

※小見出しの終わりから、行末まで伸びた罫は、入力しませんでした。

入力：阿和泉拓

校正：湯地光弘

2005年6月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

血ぬられた懐刀

国枝史郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>